

パトリック・ブロンテの学生時代 (1802-1806)

—— ケンブリッジ大学と国教会福音派

Patrick Brontë at Cambridge (1802-1806):

The University of Cambridge and Evangelical Anglicans

田 村 真 奈 美

概 要

本稿は、イングランド国教会内部の福音派の活動とその影響力の広がりについて、一人の国教会福音派司祭の生涯を追うことで明らかにしようとする研究の一部である。この司祭パトリック・ブロンテ (Patrick Brontë, 1777-1861) は貧しい生まれではあるが、ケンブリッジ (Cambridge) 大学に進み、長くヨークシャー (Yorkshire) の寒村の司祭を務めた。彼の名が知られているのは、聖職者として傑出していたためではなく、彼の娘たちのシャーロット (Charlotte Brontë, 1816-55), エミリ (Emily Brontë, 1818-48), アン (Anne Brontë, 1820-49) がそれぞれ英国文学を代表する作家となったためである。それゆえに、聖職者としてのパトリックは特別な存在ではないが、その生涯についてはある程度知られており、ケーススタディとして取り上げやすい。また、18 世紀後半から 19 世紀半ばまでの彼の生涯は、英国における福音主義による信仰復興運動の盛衰と時期がほぼ重なっている。本稿では、パトリック・ブロンテの学生時代 (1802-1806 年) に焦点を当て、当時のケンブリッジ大学における国教会福音派の活動実態に迫りたい。

キーワード：パトリック・ブロンテ 福音主義 国教会福音派 チャールズ・シメオン

I. はじめに

19 世紀英国社会に広く影響を及ぼしたと言われるキリスト教福音主義であるが、その実態は容易には把握できない。この問題については現在もさまざまな立場から研究が続いており、従来の見解に修正が加えられている。本研究では、イングランド国教会内の福音派に的を絞り、さらにパトリック・ブロンテという一人の国教会司祭をケーススタディとして取り上げながら、18～19 世紀の福音主義による信仰復興運動の実態を検証したい。

パトリック・ブロンテは、アイルランドの貧農家庭の出身であるが、1802年、25歳のときに奨学生としてケンブリッジ大学セント・ジョンズ・コレッジ (St. John's College) に入学し、1806年に卒業すると、聖職按手を受けてイングランド国教会の聖職者となった (Venn, *Alumni* 2: 1, 392)。この時期のケンブリッジ大学においては国教会福音派が盛んに活動しており、パトリック・ブロンテもまた福音派の影響を強く受け、聖職に就いた若者の一人であった。

本稿では、ケンブリッジ大学時代にパトリックと接点のあった国教会福音派の人々を中心にこの時期の国教会福音派の活動を検証し、特に福音派の信仰を持つ聖職者をいかに増やしていったのかをパトリックのケースを踏まえて明らかにしたい。¹⁾

II. セント・ジョンズ・コレッジと国教会福音派

1855年3月、パトリックの娘であり、『ジェイン・エア』 (*Jane Eyre*, 1847) の著者として有名なシャーロット・ブロンテが亡くなると、パトリックは娘と個人的に交流のあった作家エリザベス・ギャスケル (Elizabeth Gaskell, 1810-1865) に娘の伝記執筆を依頼した。その際、パトリックは自身の来歴を簡単にギャスケルに書き送っている。

My father's name, was Hugh Brontë—He was a native of the South of Ireland, and was left an orphan at an early age.... He came to the North of Ireland, and made an early, but suitable marriage. His pecuniary means were small—but renting a few acres of land, He and my mother, by dint of application, and industry, managed to bring up a family of ten Children, in a respectable manner. I shew'd an early fondness for books, and continued at school for several years—At the age of sixteen, knowing that my Father could afford me no pecuniary aid I began to think of doing something for myself—I therefore opened a public school—and <?> in this line, I continued five or six years; I was then a Tutor in a gentleman's Family—From which situation I removed to Cambridge, and enter'd St. John's College—After nearly four years' residence, I took the Degree <of> of Bachelor of Arts—and was soon after ordain'd to a Curacy in the South of England.... (P. Brontë 233)

これを読む限りでは、アイルランド北部（現在の北アイルランド）に生まれたパトリック・ブロンテがどのような経緯でケンブリッジ大学へ進むことになったのか、詳細ははっきりしない。しかしながら、

¹⁾ 国教会において福音主義的信仰を持つ人々は、教会組織よりも個人の信仰に重きを置き、神と個々の信者の間の個人的な関係を強調していた。ガレス・アトキンズ (Gareth Atkins) は、19世紀初頭にはまだ福音派は国教内ではっきりとした派閥を作っていたとは言えないと述べているが、彼らの間には仲間意識があり、自分たちを “serious”, ‘vital’, ‘awakened’ or ‘real Christians’” とみなしていたという (Atkins 37-8)。

パトリックの住んでいたドラムバリローニー（Drumballyroney）教区の司祭トマス・タイ（Thomas Tighe, 1750-1821）がケンブリッジ大学セント・ジョンズ・コレッジ出身であることはわかっており、²⁾ パトリックとセント・ジョンズ・コレッジを結びつける事由が他にないことから、タイがパトリックに勧めたものと考えられている。³⁾ パトリックは16歳から5, 6年間学校で教えた後、「紳士の家で家庭教師をした」と書いている。従来はこの紳士がトマス・タイであり、パトリックはタイの息子の家庭教師をしていたと考えられてきたが、この点については疑義も唱えられている。パトリックがタイの息子を教えたのではなく、タイの方がパトリックを教えていたというのである。⁴⁾ 結局パトリックがタイ家の家庭教師であったかどうかは不明だが、当時大学に入学するためにはギリシャ語、ラテン語を学んでいなければならない、パトリックにとってこれら古典語を故郷で学ぶ機会があったとしたら、それは聖職者からであつたらう。

1802年10月1日、パトリック・ブロンテはケンブリッジ大学セント・ジョンズ・コレッジに正式に入学を許可された。コレッジの新入生登録（Admission Register）には次のようなエントリーがある。

1235 Patrick Branty Ireland Sizar Tutors: Wood & Smith (Green 27)

パトリックの姓がBrantyとなっているのは、記録者がパトリックのアイランド訛りをそのまま綴ったためであるらしい（Barker 1; Green 27）。出身地である‘Ireland’に続く‘Sizar’はパトリックが給費生であったことを示している。当時大学へ進むのは裕福なアッパークラスやアッパーミドルクラスの子弟がほとんどであったが、‘sizar’は経済的に余裕がない家庭の子弟にも大学進学の手続きを与える制度で、その恩恵を受けた者の多くが卒業後聖職に就いた。⁵⁾ パトリックと同じ1802年の入学者のうち、貴族は7人、紳士階級に属する者が34人であったのに対し、給費生はパトリックを含めて4人であった（Green 28）。給費生として学費は減額されていたが、免除されていたわけではないため、パトリックは何らかの手段で収入を得る必要があった。彼は勉学に励むことで成績優秀者に与えられる賞金（exhibition）

²⁾ ケンブリッジ大学卒業生記録には1771年にセント・ジョンズ・コレッジに入学を許可され、1775年にBA（学士号）を取得、とある（Venn, *Alumni* 2: 4, 190）。

³⁾ パトリックがセント・ジョンズ・コレッジに入学したのはトマス・タイの影響であると最初に言及したのはギヤセルの『シャーロット・ブロンテの生涯』（*The Life of Charlotte Brontë*, 1857）。その後出版された伝記や研究書は現在に至るまでこれを踏襲している。

⁴⁾ パトリックがタイの息子を教えていたことを否定したのは *Notes and Queries*, 5th Series, vol. 12 (July 1879) に掲載された記事。エドワード・チタム（Edward Chitham）は *The Brontës' Irish Background* (1986) の中で、Hと署名したこの記事の著者はトマス・タイの親族で、タイの息子の友人であるとし、彼がタイ家の息子の誰もパトリックに教わっていないと記事の中で主張したことを紹介している（Chitham 90）。むしろタイの方がパトリックを教えていたというのもHの主張である。その後の伝記等においては、例えばジュリエット・バーカー（Juliet Barker）は従来の説を採用しているが、ダドリー・グリーン（Dudley Green）はチタムに倣ってパトリックがタイ家の家庭教師だったという説を疑問視している（Barker 5-6; Green 25）。

⁵⁾ もともと sizar には富裕層の学生の身の回りの世話をするなどの義務が伴っていたが、パトリックが入学する頃にはそのような義務はなくなっていた（Wilks 101）。パトリックのチューターであったジェイムズ・ウッド（James Wood, 1760-1839）も学部生のときには sizar であった（Barker 9; Green 29）。

を得るほか、他の学生を個人的に教えて収入を得ていたが (Barker 9-10; Green 30)、それでも収支を合わせるのは大変だったようだ。

次にあげる手紙からは、パトリックの窮状と彼がいかにそれを解決しようとしていたかがわかる。

An Irishman, of the name of Bronte entered at St John's a year & a half ago as a sizar. During this time he has received no assistance from his friends who are incapable of affording him any—Yet he has been able to get on in general pretty well by help of Exhibitions &c which are given to our sizars. Now however, he finds himself reduced to great straits & applied to me just before I left Cambridge to know if assistance could be procured for him from any of those societies, whose object is to maintain pious young men designed for the ministry. (Barker 11)

これは1804年初めに、セント・ジョンズ・コレッジのフェロウであり、ケンブリッジのホーリー・トリニティ教会 (Holy Trinity Church) の補助司祭 (curate) であったヘンリ・マーティン (Henry Martyn, 1781-1812) が、友人のイングランド教会司祭ジョン・サージェント (John Sargent, 1780-1833) に書いた手紙の一部である。この手紙を見ると、パトリックが自分からマーティンに経済的支援のあてを尋ねたこと、そしてすでに将来は聖職に就くつもりであったことがわかる。

ヘンリ・マーティンはセント・ジョンズ・コレッジを優秀な成績で卒業し、若くしてコレッジのフェロウとなった (学部生のパトリック・ブロンテよりも年下である)。ホーリー・トリニティ教会の永久補助司祭 (perpetual curate) であり福音派として知られたチャールズ・シメオン (Charles Simeon, 1759-1836) の影響を受けて、マーティンは海外宣教の道を目指し、1805年には東インド会社のチャブレンとなってインドへ赴く。国教会福音派は海外宣教に積極的であり、1799年には国教会宣教協会 (Church Missionary Society, 以下 CMS) を創設している。マーティン自身は父の死により家の経済状況が悪化したため、CMSではなく、給料の支払いを受けられる東インド会社のチャブレンを選んだ。マーティンはインドに居住する英国人のみならず、現地の人々も対象に礼拝を行い、聖書を現地語に翻訳するなど宣教活動に励んだが、1812年、イングランドへ一時帰国する途上のトルコで病死した。マーティンの友人ジョン・サージェントはケンブリッジ大学キングズ・コレッジ (King's College) に学び、卒業後は故郷サセックス (Sussex) のグラファム (Grafham) で聖職禄 (living) を得た。サージェントもまたケンブリッジ在学中にシメオンの影響を受けている。マーティンの死後、伝記 *Memoir of the Revd Henry Martyn* (1816) を執筆したことで知られている。このようにマーティン、サージェント両者ともシメオンの影響を受けた国教会福音派司祭であった。パトリックは国教会福音派の支援を受けることを考えてマーティンに相談を持ちかけたのであろう。

マーティンの手紙を受け取ったサージェントは、パトリックの支援について福音主義者の国会議員ヘンリ・ソーントン (Henry Thornton, 1760-1815) に話を持ちかけた。彼は国教会福音派の有力者の一人で、いわゆるクラパム・セクト (Clapham Sect) の主要メンバーである。ソーントンはやはりクラ

パム・セクトの主要メンバーで国会議員のウィリアム・ウィルバーフォース（William Wilberforce, 1759-1833）にも声をかけ、二人でパトリックの学費を支援することとなった。^{6）} マーティンがこの件についてウィルバーフォースに感謝の意を表した手紙（1804年2月14日付）もまた残っている。

I availed myself as soon as possible of your generous offer to Mr Bronte and left it without hesitation to himself to fix the limits of his request.

He says that £20 per annm. will enable him to go on with comfort, but that he could do with less. He has twice given me some account of his onset to college, which for it's singularity has hardly been equalled, I suppose since the days of Bishop Latimer. He left his native Ireland at the age of 22 [*sic*] with seven pounds, having been able to lay-by no more after superintending a school some years. He reached Cambridge before that was expended, and then received an unexpected supply of £5 from a distant friend. On this he subsisted some weeks before entering St John's, and has since had no other assistance than what the college afforded. There is reason to hope that he will be an instrument of good to the church, as a desire of usefulness in the ministry seems to have influenced him hitherto in no small degree. I desire to unite with him in thanks to yourself and the directors of the Society. (Lock and Dixon 18)

この手紙の裏にはウィルバーフォースの字で 'Martyn about Mr Bronte. Henry Thornton and I to allow him £10 each annually.' と書かれており、パトリックは年 20 ポンドの支援を取り付けていたことがわかる。

この手紙の最後の 'the Society' と先に引用したサージェント宛のマーティンの手紙にあった 'any of those societies' は、聖職を目指す有望な若者を支援する福音派のグループを指していると考えられる。ガレス・アトキンズは著書 *Converting Britannia: Evangelicals and British Public Life, 1770-1840* (2019) の中で、聖職を目指す若者を支援する協会について説明している (39-42)。それによると、まず 1767 年にヨークシャー聖職者クラブ（のちのエランド協会 (Elland Society)）が創設された。創設に力を尽くしたのは 1759～71 年にヨークシャー、ハダーズフィールド (Huddersfield) で主任代行司祭を務めたヘンリ・ヴェン (Henry Venn, 1725-97) と、彼と親交のあった国教会福音派の人々であった。エランド協会は、貧しいが信仰心は篤い若者を聖職者として教育するための基金を設立し、寄付を募った。ヨークシャー内部にとどまらず、ウィルバーフォース、ヘンリ・ソーントン、ウィリアム・ロメイ (William Romaine, 1714-95)、チャールズ・シメオンら福音派の有力者たちが寄付をした。多額の寄付を集めたエランド協会は、有望な若者をケンブリッジ大学のモードレン・コレッジ (Magdalene

^{6）} ヘンリ・ソーントンは銀行家であり、ロンドンのサザーク (Southwark) 選挙区選出の国会議員。ロンドン南西部のクラブに生まれた。富裕な銀行家であった父のジョン・ソーントン (John Thornton, 1720-90) を始め、兄たちも国教会福音派の信仰を持っていた。ウィリアム・ウィルバーフォースとは親同士が従兄弟。

College) に送り、福音派の聖職者を養成することに成功している (1778-1800 年のあいだに 56 人の給費生を送り出している)。基金から経済的な支援を受けた若者の中には、ヘンリ・ジャウエット (Henry Jowett, 1756-1830) などのちに教授職に就いた者もいる。

他にも同様の目的を持つ協会の設立が続いた。1795 年に設立されたブリストル聖職者教育協会 (Bristol Clerical Education Society) は 1826 年までに 100 人以上の給費生を主にオックスフォード (Oxford) 大学のセント・エドモンド・ホール (St Edmund Hall) に送り出している。さらにクリエーション協会 (Creation Society)、シメオンの支援を得て設立されたロンドン聖職者教育協会 (London Clerical Education Society)、そしてより小規模な地方の協会などが続いた。また、このような支援を受けずに進学した若者が経済的苦難に直面した際にも、これら協会は臨時の支援を行っていた。パトリック・ブロンテはこの臨時の支援を得ようと、ヘンリ・マーティンに相談を持ちかけたのであろう。

Ⅲ. チャールズ・シメオン

ケンブリッジ大学における国教会福音派の活動が目につくようになったのは、この時代のケンブリッジにチャールズ・シメオンがいたからと言っても過言ではない。チャールズ・シメオンは 1759 年にレディング (Reading) で生まれた。イートン (Eton) 校から、1779 年ケンブリッジ大学のキングズ・コレッジに進み、そこで福音派の信仰に目覚めたという (Carus 14-7; Hennell and Pollard 24-5)。1782 年にはキングズ・コレッジのフェロウとなり、1782 年 5 月 26 日、イーリー (Ely) 主教より聖職按手を受けた (Carus 24)。大学の長期休暇中には、ケンブリッジの聖エドワード・キング・アンド・マター教会 (St Edward King and Martyr Church) で主任代行司祭 (vicar) のクリストファ・アトキンソン (Christopher Atkinson, 1754-1795) の代わりを務めるようになったが、アトキンソンは福音派の司祭であり、シメオンは彼を通じて、シドニー・サセックス・コレッジ (Sidney Sussex College) に在籍していた、後にクラパムのホーリー・トリニティ教会の主任司祭 (rector) となるジョン・ヴェン (John Venn, 1759-1813)、その父で国教会福音派として著名な聖職者であり、当時はハンティンドンシャー (Huntingdonshire)、イエリング (Yelling) の教区教会であるホーリー・クロス教会 (Holy Cross Church) 主任司祭であったヘンリ・ヴェンの知己を得た。それまでのシメオンは信仰を同じくする (つまり、福音主義的な信仰を持つ) 者になかなか出会えずにいたが (Carus 25-6; Moule 11)、ここから国教会福音派の人々とのつながりができてゆく。

1783 年、ケンブリッジのホーリー・トリニティ教会の司祭が亡くなると、シメオンはその後継となる (Carus 37-9).⁷⁾ 当時はメソヂストと同一視されることもあった国教会福音派のシメオンがこのポストに就くことができたのは、イーリー主教がチャールズ・シメオンの父の知人であり、チャールズが

⁷⁾ 資料によって、シメオンの叙任、およびホーリー・トリニティ教会司祭となる年の記載が異なっているが、ここではシメオン本人の日記が引用されている Carus による伝記にある年月日を採用した。Moule, Hennell and Pollard もこの年月日を採用している。

父に口添えを頼んだからであった。しかし、教区民は福音派司祭に反発し、シメオンは礼拝が妨害されるなどの困難に直面した。彼の説教がようやく教区で受け入れられるようになったのはそれから3年余りも経った頃のことである（Carus 59）。

シメオンは福音派に対する風当たりの強さを肌で感じながらも、教区で、また大学で、福音派の信仰を広めることに努めた。その中で、特に国教会福音派にとって重要であったと思われる活動が二点ある。一つはコレッジでの教育、もう一つは聖職禄を購入するための基金（trust）に関わる活動である。

シメオンは1790年に説教クラス（sermon classes）をコレッジの自室で開講した。これは聖職按手志願者を対象とし、毎週日曜日の夕方、説教の書き方と話し方を教えるという実践的なクラスだった。当時の大学では、将来聖職をめざす学生にこのような実践的な技術を教えるとはおらず、説教を自分で書く司祭も多くはなかった（Hennell and Pollard 140-1）。シメオン自身も聖職者になってから自分で説教の方法を確立していったのだが、あるときジャン・クロード（Jean Claude, 1619-87）の *Essays on the Composition of a Sermon* (1778) を読んで、⁸⁾ その方法が自分のやってきたことと同じであることを知った。これをきっかけとして、彼はクロードの本をテキストにした説教のクラスを開くことを考えたのである（Carus 51）。以下は、初期のクラスの様子である。

Very soon Simeon seems to have replaced the lecture by the sermon class proper, using his own edition of Claude's essay as a text-book. Instruction in elocution was also given. Attached to Simeon's edition of Claude's essay were a hundred skeletons of sermons he had himself preached. ... The skeletons themselves were intended to be used by young clergy as the framework from which their own sermons could be written; this is made quite plain in the Preface to the *Horae Homileticae*. (Hennell and Pollard 142-3)⁹⁾

この説教のクラスの受講者は人数が限られており、1828年の時点でも15～20人ほどしかいなかったというが（Hennell and Pollard 143）、1812年からは学生ならびに教職員の誰もが参加できる「会話の集い」（“conversation parties”）も始めた。これもまたシメオンのコレッジの自室で開催されたが、説教クラスよりもインフォーマルな雰囲気で、参加者も40～60人と規模が大きかったが、その多くはやはり聖職按手志願者であったという（Hennell and Pollard 145）。これらの集まりで、彼は自らの考え方を学生たちに伝え、その影響を受けた者たちが卒業後は聖職者（特に福音派の聖職者）として英国中に広がっていったのである。

シメオン自らが経験したように、18世紀末から19世紀初めの時期には国教会内部にも福音派を警戒

8) ジャン・クロードはユグノーの聖職者であり、原著はフランス語。

9) 説教クラスは初期にはサンデイ・イヴニング・レクチャーズ（Sunday evening lectures）と呼ばれていた（Carus 78）。また、シメオンの主著 *Horae Homileticae* の元となったのが、この説教クラスで用いられていた教材であるという（Hennell and Pollard 143）。

する雰囲気があり、聖職者となっても、聖職禄を持つ司祭となる道は険しかった。このため、国教会福音派では当時売買されていた聖職推挙権（advowson）を買い入れる試みが行われていた。聖職推挙権を所有することで、その教区に新たに福音派司祭を誕生させられるだけでなく、その司祭が去った後も別の福音派の聖職者に後を継がせることができるようになるのである。パトリックの学費を援助したヘンリ・ソーントンの父、ジョン・ソーントンは莫大な富を福音主義的信仰に利する目的に使ったが、その一つが聖職推挙権を購入することであった。“If you hear of any Advowsons or Presentations to be sold in useful spots with Incumbents above fifty or sickly, I should be glad to lay out a few Thousands that way”とソーントンは友人への手紙に書き送っており、¹⁰⁾ ビジネスライクな態度で有力な教区の聖職推挙権および推薦権（presentation）を次々と購入していたことがわかる。1790年にソーントンが亡くなった時には9つの教区の聖職推挙権と、聖職推薦権1つが遺された。1813年シメオンはこれらを管理するソーントン・トラスト（Thornton Trust）の受託者（trustee）の一人となる。ソーントン・トラストが解散すると、その一部を受け継いでシメオン・トラスト（Simeon Trust）を設立する。その後、自らも聖職推挙権を買い足して、有望な福音派の司祭を何人も誕生させた。

さて、これらシメオンによる活動の恩恵を、ケンブリッジ在学時のパトリック・ブロンテは受けたのだろうか。パトリックとシメオンを直接結ぶ証拠は実はほとんどないのだが、パトリックがシメオンを知っていたことは間違いなさであろう。19世紀初頭にケンブリッジ大学に在籍した福音派の聖職按手志願者が、キングズ・コレッジのフェロウであり、ホーリー・トリニティ教会司祭であったシメオンを知らないというのは考えにくい。また、パトリックが経済的援助のあてを尋ねたヘンリ・マーティンはホーリー・トリニティ教会の補助司祭であり、シメオンの愛弟子でもあった。シメオンの死後、1847年に出版されたウィリアム・カルス（William Carus）による伝記 *Memoirs of the life of the Rev. Charles Simeon* をパトリックの娘のシャーロットが友人から借りており、それを読んだ父の感想を次のように友人に書き送っている。

Papa has been very much interested in reading the book—there is frequent mention made in it of persons and places formerly well known to him—he thanks you for lending it him. (C. Brontë 104)

この手紙からではパトリックがシメオンをどの程度知っていたのかはわからないが、シメオンを取り巻く福音派の人々をも「よく知っていた」というのであれば、コレッジの説教クラスに参加していた可能性はあるし、少なくともホーリー・トリニティ教会の日曜礼拝ではシメオンの説教を聴いていたであろう。ケンブリッジでシメオンの薫陶を受けた若者たちを「シメオン派」（“Simeonites”）と呼ぶが、パトリックもまた広い意味でシメオン派の一人であったと言えるであろう。

¹⁰⁾ John Thornton to William Richardson, 17 Oct. 1787. Qtd. in Atkins 30.

IV. 結び

聖職者となったパトリックは行く先々で福音派の聖職者たちに出会う。一つの出会いが縁となってポストが決まり、またそれが出会いを呼んで次のポストへと繋がってゆくということを繰り返して、ついに彼は特に国教会福音派が多い土地の一つ、ヨークシャーで司祭となるのである。パトリックは福音派が確保していた聖職禄の恩恵には与らなかったが、それでも福音派の繋がりで、かつて福音派の伝説的な司祭ウィリアム・グリムショー（William Grimshaw, 1708-63）がいたヨークシャーのハワース（Haworth）で永久補助司祭となった。大学入学前から在学中と、国教会福音派の支援を受けていたパトリックもまた、この時代のケンブリッジ大学における福音派の聖職者育成の「成果」であったのである。

参考文献

- Atkins, Gareth. *Converting Britannia: Evangelicals and British Public Life, 1770-1840*. Boydell Press, 2019.
- Barker, Juliet. *The Brontës*. Weidenfeld and Nicolson, 1994.
- Brontë, Charlotte. *The Letters of Charlotte Brontë*. Vol. 2. Edited by Margaret Smith. Clarendon Press, 2000.
- Brontë, Patrick. *The Letters of the Reverend Patrick Brontë*. Edited by Dudley Green. Nonsuch Publishing, 2005.
- Carus, William. *Memoirs of the Life of the Rev. Charles Simeon, M. A.* 3rd ed., J. Hatchard, 1848.
<https://archive.org/details/mlifeofr00sime/>
- Chitham, Edward. *The Brontës' Irish Background*. Macmillan, 1986.
- Gaskell, Elizabeth. *The Life of Charlotte Brontë*. 1857. Oxford UP, 1996.
- Green, Dudley. *Patrick Brontë: Father of Genius*. Nonsuch Publishing, 2008.
- Hennell, Michael, and Arthur Pollard, editors. *Charles Simeon (1759-1836): Essays Written in Commemoration of his Bi-Centenary*. S.P.C.K., 1959.
- Lock, John, and W. T. Dixon. *A Man of Sorrow: The Life, Letters and Times of the Rev. Patrick Brontë 1777-1861*. Nelson, 1965.
- Moule, H. C. G. *Charles Simeon*. Methuen, 1892.
https://www.google.co.jp/books/edition/Charles_Simeon/smEAAAAAMAAJ?hl=ja&gbpv=1
- Venn, J. A. *Alumni Cantabrigienses: A Biographical List of All Known Students, Graduates and Holders of Office at the University of Cambridge, from the earliest times to 1900*. Part II: From 1752 to 1900. Vol. 1, Cambridge UP, 1940.
<https://archive.org/details/p2alumnicanabri01univuoft/p2alumnicanabri01univuoft/>
- Venn, J. A. *Alumni Cantabrigienses: A Biographical List of All Known Students, Graduates and Holders of Office at the University of Cambridge, from the earliest times to 1900*. Part II: From 1752 to 1900. Vol. 4, Cambridge UP, 1954.
<https://archive.org/details/p2alumnicanabri06univuoft/p2alumnicanabri06univuoft/>
- Wilks, Brian. 'Patrick Brontë: the Man who Arrived at Cambridge University'. *Brontë Studies*, vol. 39, no. 2, 2014, pp. 93-105.
- リヴィングストン, E. A. 編『オックスフォード キリスト教辞典』木寺廉太訳, 教文館, 2017 年.